

## 104 虚弱児童の自律神経緊張状態

(大阪学芸大 衛生) ○吉矢 元彦

(宝塚 精常学園) 別所 彰

昭和33年8月1日、宝塚市花屋敷の精常学園に収容された夏季修練会の児童生徒数10名のうち、典型的な虚弱児童20名について、血液成分(血清Ca量, リンパ球百分率の2項目)および Wenger 法(唾液分泌量, 脈圧, 最小血圧, 呼吸数, 舌下温度, 脈数の6項目)を測定した。

血清 Ca 量は平均11.345 mg/dl で、8月の健康児童49名の平均10.46mg/dl より多く、リンパ球百分率は41%で、健康児童の42.5%とほとんど変わらない。Ca と L の規正偏差の和をとると、20名中副交感神経緊張が19名、交感神経緊張が1名、中間型はなかった。

Wenger 試験では、20名の平均が、脈数67.6、3分間唾液を思いきり出させた量が1.9cc、脈圧54、最小血圧45、呼吸数19.3、舌下温度37.3°C で、因子得点は+0.83となって、小学6年生200名の平均-0.04、 $\sigma$  0.74とくらべて副交感神経緊張である。この方法では副交感緊張が13名、交感緊張が1名、中間型が6名であった。

このように、虚弱児童は貧血その他の要因もあるが、血液成分法でも Wenger 法でも副交感緊張に傾いているので、精常学園で8月1日から20日間、4時30分起床で錬成を主として行なっている方法がよいと思う。

## 105 神経質における素質と環境との問題

(九州厚生年金病院 小児科) 高木 俊一郎

神経質という言葉は一般によく用いられるが、その概念ははっきりしていない。私はここで物理的・生理的・精神的刺激に対する心理反応が表情・社会行動・習癖あるいは身体反応などに現われやすい傾向、すなわち精神反応過敏性をいわゆる神経質と呼ぶ。諸家が神経質の特徴として挙げている項目105項目を統計的に処理して50項目を選び、いわゆる神経質傾向調査表と名づけた。この表を3才の幼児より小学校3年までの学童約2,500名に用い、神経質傾向の強い群と弱い群とを比較した。

1) 物理的環境(住居の場所, 来客の多寡, 騒音等)は子供の神経質傾向にあまり関係がない。

2) 両親の年令, 本人の同胞中の順位などは著明な影響はないが, 祖母の存否は祖父の場合より関係が深い。